季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉

通巻23号

秋号

2006

9,10,11月

13区 まちむらの唄から 覗いて見れば

レプリカは「ニセモノ」か？

巻頭エッセイ◉このまちのこと

ゆきのまち、上越

◉この人に学べ◉

高田を近代化した人

川合直次

配流800年 親鸞の風景

ゐなかの人々と親鸞1

【カメラの眼】

【夏まちなか点描】

季刊 直江の津 第23号 秋号
2006—9・10・11

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
ゆきのまち、上越　内藤 宏　3

■配流800年 親鸞の風景
連載3　ゐなかの人々と親鸞1　松野純孝　4

■13区 まちむらの唄から覗いて見れば　6
うたのむこうに見えるもの　杉みき子

■レプリカは「ニセモノ」か？　笹川修一　12

■この人に学べ　川合直次　17

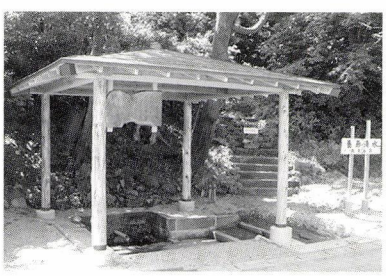
■カメラの眼　27

■読書びと
おいてけぼり　州之内徹著　26

■建物さんぽ　22

■上越産業振興研究所レポート　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



地元の工務店有志の奉仕で再建された
「養爺清水」のあずまや

♣巻頭エッセイ
内藤 宏さんのこと

昭和53年北海道網走市生まれ。弘前大学教育学部卒業後、青森市の㈱企画集団ぷりずむ入社。隔月刊『ゆきのまち通信』編集担当。同誌は雪降る地方の暮らしを語り合う、地方発信型のネットワーク誌として平成元年創刊。105号（7月1日発行）で特集「上越高田雁木の街」を企画。
雪と暮らしが結びつく各地を巡るたび、その奥深さを感じさせられる。

ゆきのまち、上越

内藤　宏

恥ずかしながら、「雪の高田」という言葉があることをこの二月まで知らなかった。あまりの大雪に街が埋もれ、「この下に高田あり」という立て札が雪原に立つほどだったという逸話があることも。

雪国発のコミュニティ誌『ゆきのまち通信』編集に携わっているが、まだまだ雪の世界は奥が深い。

上越市を初めて訪ねた二月一日。目的は、雪氷技術や雪の利活用について意見交換を図る「ゆきみらい２００６in上越」。シンポジウムは高田会場、見本市は直江津会場と行ったり来たりしていたのだが、高田と直江津は雪の降り方が違っていた。雪に関心の高い参加者が集まるこの催しに合わせるかのように開催中は雪が降り続き、屋外の除雪機械見本市では吹雪で展示がかすんでいたほどだった。

また別な会場では、「雁木」が再現されていた。呼び方は異なるが、青森県黒石市にも「こみせ」というものがありそれ自体は見慣れていたのだが、町並みの展示を見てはたと写真の前に立ち止まり、目が釘付けになった。「一斉雪下ろし」。雁木の並ぶ街路の真ん中にこんもりと積み上がった雪山。そして、屋根から「雪とよ」を使って雪を下ろす場面。「これはいつの時代の写真なのだろう?」と思ったら、今年の写真と知ってまたまたびっくり。高田でも一斉雪下ろしが行われたのは実に二十年ぶりだったというのは後日知るのだが、このような冬に、上越を訪ねることができた意味は大きかった。

翌日は市民グループ「あわゆき組」が主催する「あわゆき道中」に同行した。女性はかくまき、男性はトンビをまとって雪の中を歩く。ゆきのまちのおしゃれを見直し、町家の風情に感心した。おもてなしも実に温かいものであった。「地元の人にもっともっとこの街のことを知ってもらいたい」とメンバーの方が話されていたが、その地道で手づくりの活動は、本当に多くの人に注目して欲しいし、エールを送りたくなった。この取材をきっかけに、特集「上越高田・雁木の街」の本誌七月号は発行となった。今回は高田が中心だったが、次はぜひ直江津の町を歩いてみたいと思っている。

ところで同じ上越市で、安塚区とは合併以前から本誌と縁が深い地域だ。雪の利活用の先進地として全国的に知られるが、七月に「第一回雪の市民会議」が開かれ、雪を語る新たなステージがまた始まった。こちらも取材したが編集の上でも、初心を見つめなおす、いい機会となった。

雪とのつきあいに昔ながらの伝統が今も残り、雪降る土地を楽しんでいる人たちがいるまち、上越。

雪の恩恵を受けて、雪の活用のあり方を知っているまち、上越―「ここに、ゆきのまちあり」。

配流八〇〇年

親鸞の風景

●連載3

ゐなかの人々と親鸞 1

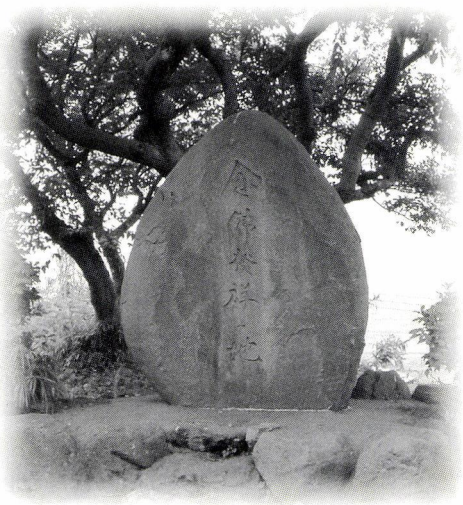
―― 十字名号本尊の独創 ――

松野純孝

三十五歳二月、上越に配流となった親鸞は三十九歳十一月勅免となった。流罪中は、法然を信じ、それまでの一切の雑行を棄てて本願に帰した二十九歳春から遠流になる三十五歳春迄の六年間にわたる法然門下の時代は、師の言葉、同志の言葉の一語一語がいわば血となり肉となる一日一日であり、その再確認に集中した。そして赦免後の新天地の開拓に思いを凝らした。

法然の「ただ念仏」とは所詮、一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらと同じくなることであった。それはゐなかの人々とおなじくなることと親鸞は解した。ゐなかの人々とは、「文字のこゝろもしらず、あさましき愚癡(ぐち)きわまりなき」ものと親鸞は言っているからである。この愚鈍下智の者は貧窮困乏、破戒無戒の人達でもあった。

まず信者となるには、本尊と聖教が必須のもの。旅の僧は携帯用の本尊と聖教を所持していた。親鸞と同年生れの明恵は高尾から紀州白上の峯に下向するとき本尊と聖教を負っている。では親鸞は上越に来たとき、どんな本尊と聖教を荷ってきたのか。



法然の門下に入って僅か四年目の三十三歳、法然の『選択(せんちゃく)本願念仏集』の書写を許され、同年四月それに、「選択本願念仏集」の内題の字と「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」と「釈綽空」の字とを法然の真筆で頂いた。そして同日、法然の真影を申し預り、これを画かせていただいたが、同年閏七月、その真影の銘に、「南無阿弥陀仏」と善導の本願加減の文とを真筆で頂戴した。『選択本願念仏集』を授かった者は文献上六人に過ぎず、自ら書くことを余りしなかった法然から真筆でいただくということは正に破格というべきであった。

さて、その真影が「選択相伝御影」として現存している（中沢見明・小山正文・平松令三氏らの論文）。上越での親鸞の本尊はまずこれに相違ない。聖教の一つも書写した『選択本願念仏集』であることは論を俟つまい。

選択相伝御影は法然像の上部賛銘右に「南無阿弥陀仏」、次に一字下げて加減の文が六行にわたって四十九字（但し二字重複）書かれている。また『選択本願念仏集』の方

は廬山寺本によって推測すると、「選択本願念仏集」の内題の字の次に行を改め同じく肩を並べて「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」と書かれたと思われる。両者に共通しているのは「南無阿弥陀仏」の六字の名号とそのこころの文である。一つは往生するための行為は念仏を以って本とするとあり、もう一つは、更にそのこころを推し進めて「ただ※念仏」によって往生すると言い切った善導の本願加減の文を書しているのである。

ところで法然像の絵は高価でとても貧しいゐなかの人々には購入できるものではない。明恵は建保二年（親鸞＝四十二歳、一家が越後から関東に移住する年）、名字本尊を考案する。それは木像とか絵像では貧窮の人には求められない。そこでどんな貧しい人でも本尊とできる名字本尊を考えたというのである。法然の『選択本願念仏集』に徹頭徹尾反論した明恵であったが、却って法然の易行・平等の精神に刺激されてのものであった。

平松氏は明恵の名字本尊に先行して既に法然に、熊谷直実に与えた名号本尊のあったことに言及されている。六字名号が中央に大書され、その両脇に真如堂の如来から授かった和歌が書かれている。法然が弟子の勢観房に授けた金色の名号を直実が余りのほしさに強奪したので、早く返しなさい。その代りに名号を書いてあげます。金色の名号にしたいのですが、その暇がないので墨書のままで送りますと（建永二年正月朔日付の熊谷入道宛書状）。建永二年正月は、承元の法難の一か月前にあたる。

親鸞が本尊としている選択相伝御影ではゐなかの人々の本尊とはなしえない。まず中心となっている法然の絵像を取りはずさなければならない。そうすると、六字名号が中心となり、本願加減の文がいわば賛銘となる。前記直実に与えた六字名号は法然が暇のないため、金色でなく墨書で而も蓮台もない。蓮台も手間と費用がかかるのでゐなかの人々には望めない。

六字名号と本願加減の文があれば、それは単に本尊であるだけでなく、聖教の役割も果すことになる。聖教もゐなかの人々は購入できない。ゐなかの人々は掛けている本尊に礼拝と共に六字の名号のいわれも聞くことができることになる。親鸞はここでこの二つを更に一つにした。即ち世親と曇鸞の「帰命尽十方无碍光如来」の十字名号本尊である。南無阿弥陀仏は梵語で、この十字はその訳語、六字名号の体を最も深くあます所なく的確に表現している訳だからである。親鸞はゐなかの人々にこの十字で六字名号のこころを力を尽くして解説している。それは何よりの聖教なのである。つまり十字名号は本尊であるばかりでなくまた何よりの聖教でもあったのである。真宗はここから「无碍光衆」とも言われていた。

この十字の名号本尊は親鸞門徒以外には見えない親鸞の独創といえる。つまり親鸞はこれまでの本尊では通用しなくなり、越後のゐなかの人々によって独創の十字名号本尊を案出し得たのである。ただ念仏への成果である。平松説によると綽空（道綽、源空）から親鸞（世親、曇鸞）への改名は選択相伝御影成立の日と同日となる。そこで親鸞は遠流に背負ってきた聖教には浄土三部経は言う迄もなく、また世親の『浄土論』と曇鸞のその注釈である『論註』をも携えてきたにちがいない。十字名号についてはまた次号にし、別な視点から続けてみたい。

※大経の第十八願（念仏往生の願）文を善導流に加減して、声の念仏の意にした。

仏教学者／上越教育大学名誉教授・元学長　上越市牧区東松ノ木・一念寺

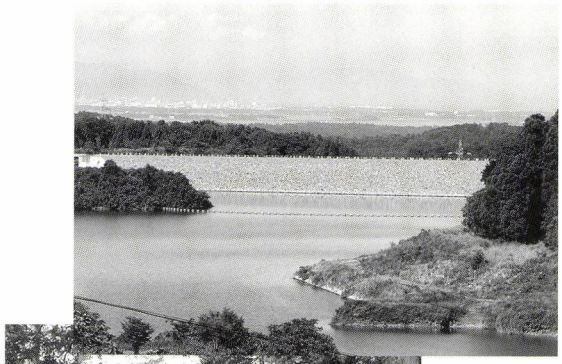
13区 まちむらの唄から 覗いて見れば

柿崎ふれあい音頭

作詞　高橋八郎
作曲　市川昭介
唄　大和さくら
制作　平成五年
五番まで

ハアー
高きその名も　景家公が
眠る古刹よ　楞厳寺
ダムの水面に　夕陽が映えて
泉わき出る　あの大出口
越は柿崎　ふれあい音頭
どんと弾んで　ひと踊り　ひと踊り

市街地まで望む柿崎川ダム





楞厳寺

鵜の浜小唄

作詞　公募
作曲　平尾昌章
唄　三橋美智也
三番まで

あれは佐渡かよ　雲さえなびく
わしが想いは　あの娘になびく
あの娘色白　雪国育ち
抱いてやりたや　人目をさけて
ここは鵜の浜　ああ　夢の夜

吉川町音頭



尾神岳

作詞　柏野イサ子
作曲　小林房雄
唄　林　友子
制作　平成二年十月
四番まで



夕日の森展望台



大潟沖を行く北海道フェリー

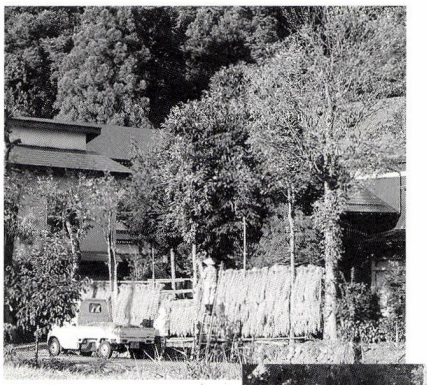
大島村民歌



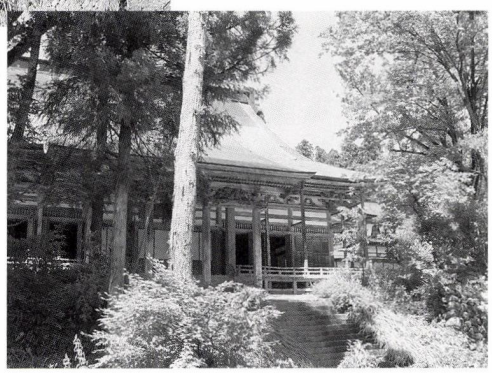
板山不動

作詞　岩野正雄
作曲　小杉誠治
三番まで
今も11時半のチャイムに使用

月の岩屋の不動尊
小海鼻毛や野々見池
このよき郷にはぐくまれ
歴史をひらきていそしめば
楽しき村に夢がわく
我が大島に夢がわく



小黒（こぐろ）専敬寺

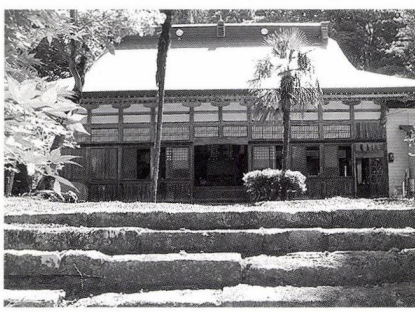


安塚町民音頭

作詞　小林美枝子
作曲　鷹尾　繁
唄　高橋亜希子
制作　昭和六十年
（町制三十周年記念）
四番まで

秋は菱の根　もみじに映えて
小黒川辺に　稲穂がそよぐ
今日のしあわせ　笑顔で交わす
稔りゆたかな　愛の里
ほんに安塚　よいところ
ほんに安塚　よいところ

越の三大刹「雲門寺」



うらがわら音頭

作詞　竹内友幸
作曲　小林房継
制作　昭和五八年
四番まで

春の一番　吹くころは
山の畑は　ぶどうの手入れ
こだまするよな　歌声に
赤いたすきの　娘もまじる
ほんに明るい
ほんに明るい　浦川原



山本ぶどう園



虫川大杉

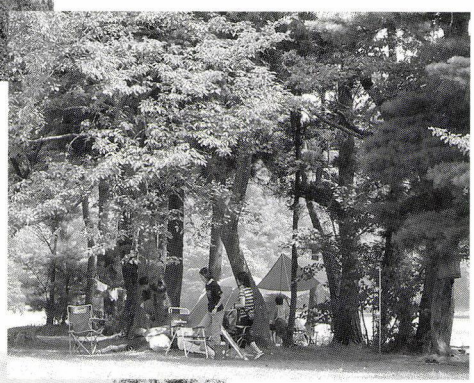
ハアー
けがれ知らずの　新雪と
くらすいろりの　小半年
わらび　ぜんまい　ふきのとう
雪の中から　春の歌
ほんに住み良い
ほんに住み良い　吉川町だよ

＊旧大島村では「音楽村宣言」（平成三）に、作詞伊藤アキラ・作曲小林亞星「蛍の里」が発表されている。
＊旧安塚町では同じく三十周年記念として「雪のふるさと」が制作されている。
＊旧浦川原村には竹内友幸作詞、村内小中音楽主任作曲の「ふるさと賛歌」がある。

頸城村村民歌

作詞　谷澤龍史
作曲　大給正夫
制定　昭和六二年
三番まで

大空に　光あふれて
頸城野は　生命みなぎる
みどりの　大地拓いて共に
世紀の夢を育ててゆこう
くびき　くびき
われらの　くびき


大池いこいの森


米本陣から頸城平野の展望

越後さんわ音頭

作詞　山田孝雄
作曲　新井利昌
歌　村上幸子
制作　昭和六二年
四番まで

米を育てりゃ　八十八の
苦労苦労の　手をかける
若い娘と　さんわの米は
肌もしらゆき　コシヒカリ
さあみなさん　一度はおいで
（イット　ニト　さんわ）
越後さんわは　越後さんわは
夏まつり　夏まつり

宮口古墳群



牧村民歌

作詞　小山直嗣
作曲　小杉誠治
制作　昭和三九年
三番まで

みどりなす　白峰（しらふ）の山に
希望よぶ　光あふれて
躍進の　歌が脈うつ
おお　わが郷土牧村
この村の　空のあかるさ
この村の　水のゆたけさ

くびき音頭

作詞宮森茂勇・作曲春日昭男

昭和六十年、文化協会主催の発表会で披露された。

かすみたなびく　かすみたなびく朝露の
土を蹴たてて　トラクター
腕もたしかよ　ハンドルさばき
さあつくろう　輪になって
くびき音頭で　手拍子で

えちご清里音頭


イネ文字の里　棚田

作詞　古沢正俊
作曲　真木憲一
歌　京極加津恵
四番まで

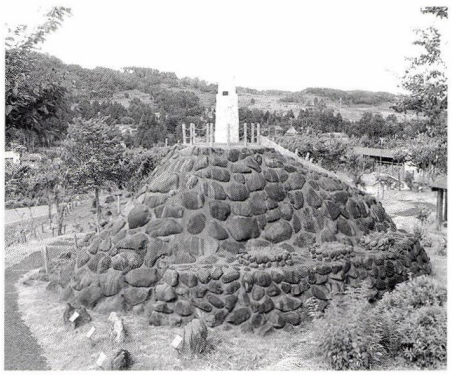
＊作詞者古沢正俊氏が個人的に作詞したものを村政施行三十周年記念事業として制定。

ハァー　春は鶯　早わらび摘んでヨー
梅と桜の　春まつり　ア　サテ
ごらん　妙高　火打も映えて
夢も　ひろがる
夢も　ひろがる　日本海　サテ
ほんに清里　よいところ
サァサおいでよ　みなおいで　ソレ
歌って踊って　シャシャンとシャン

板倉町民歌

作詞　相馬御風
作曲　小林　礼
制定　昭和三三年
　　四番まで

山うるわしく水清く
ながめるは広し田に畑に
群がる部落五十一
人口一万有余千
歴史のあともいと古き
板倉町はわが郷土



日本一の積雪のモニュメント　8.18m

中郷 YOITOKO

作詞　宮尾俊行
作曲　宮尾俊行
歌　松井静子
制定　平成十二年（閉村式で発表）
　　三番まで

エー　越後中郷は　越後中郷は
　（あーどした）
緑豊かな故郷だよ
　（あーなるほど）

かくれたまちの歌

高田の四季

町田太郎作詞・作曲

高田の春は爛漫と
古城を包む春がすみ
　ああこの地　我等が故郷
頸城平の緑を越えて
　虹がかかるよ妙高山に

高田の夏は爽涼と
日本海の波が呼ぶ
　ああこの地　我等が故郷
榊神社の森たそがれて
　南葉の山に半輪の月

高田の秋はさやけくて
青田の川に紅葉うく
　ああこの地　我等が故郷
森の都も錦をおびて
　鐘がどよむよあの寺町に

高田の冬はひひとして
繚乱香る六つの花
　ああこの地　我等が故郷
金谷山頭スキーにくれて
　雁木に映ゆる町並みあかり

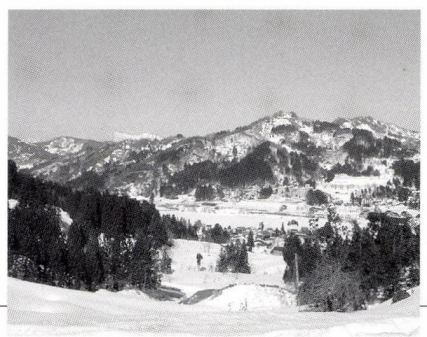
おらがふるさと
—東頸城の歌—

作詞・作曲星野健蔵

おらーが　ふるさとは　ひがしくびき
うしの子が　モーとなく　さとでした
おもいだす　ちいさいときに　くさかりで
すいこくったっけ　すいこくったっけ

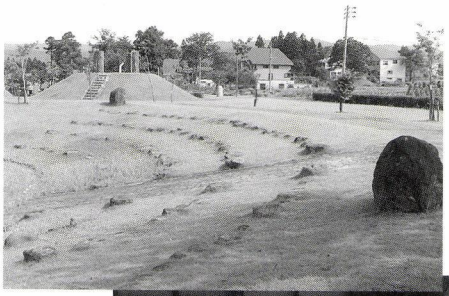
おらーが　ふるさとは　ひがしくびき
がんばちが　ブーンととぶ　さとでした
おもいだす　ちいさいときに　はんしょうのしたで
はちんこくったっけ　はちんこくったっけ

おらーが　ふるさとは　ひがしくびき
ぼたゆきが　ドカッとふる　さとでした
おもいだす　ちいさいときに　さいのかみで
すすけもちくったっけ　すすけもちくったっけ



稲は黄金に　仰げば妙高
（あーそれから）
片貝・渋江川・矢代川
（あーこりゃまた）
田畑を潤す　自然の恵みよ
（あーがってん）
だすけ中郷　一番だ（あーそだねゃ）
いいねや中郷　良いところ
（ヨイヤッサー　ヨイヤッサー）
板橋　藤沢　三ツ屋　坂本　（ハッ）
新道　二本木　松崎　五反田　（ヨッ）
市屋　片貝　福崎　江口　（ホッ）
稲荷山　宮野原　江端　金山　（ハッ）
四ツ屋　下中嶋　八斗蒔　岡川（ヨッ）
岡沢　福田　松ケ峯　野林　（ホッ）
（ドッコイ　ドッコイ　ドッコイサー）
*「よさこいソーラン」と「盆踊り」バージョンがある。

泉縄文公園



名立音頭

作詩　和田喜代数
作曲　小林房継
唄　高城みゆき
制作　昭和四七年ころ
六番まで

霧の湧く谷　雲おく峰に
ひらく林道　どこまでも
袋小路は　昔の話
今じゃ新井も　すぐ隣り
ホンに新井も　すぐ隣り



げんぎょ干し

上越市民の歌

作詞　小林隆治
作曲　狛林正一
制定　昭和五一年
五番まで

むかし栄えし　五智国府
いまは谷浜海の宿
波のかなたの佐渡までも
時代はめぐる日本海
ああ　わがまちは　上越は
あゆみたゆまず　すすむまち



五智国分寺三重塔



うたのむこうに見えるもの

杉　みき子

もう何年か前になるが、新聞の投稿欄に、県民歌を歌おう、という意見が載った。新潟県にもりっぱな県民歌があるのだから、埋れさせておかないで、大いに歌おう、というのである。

なるほど、それを読んで思い出した。戦後まもなく、たしか公募で県民歌が選定され、当時ラジオなどでよく流されていた。〈県民二百五十万　希望に燃えてこぞり立つ　ここぞ民主の新潟県〉というところだけおぼえている。民主の新潟県、というのがいかにも戦後的で、取ってつけたようでおかしかったが、その後ほとんど歌われなくなってしまった。時代の差もあり、もしいま復活されても、愛唱されるのはおそらく無理だろう。

このたび、新しい上越市に含まれる各地域の、住民歌ともいうべき歌の歌詞をまとめて読む機会を得たが、これらが実際に、どのくらい地域で歌われているのかは、よくわからない。まあ、歌詞や曲がどうあろうと、自分の住む町や村の歌として、その地の人々に愛唱されているというのなら、もちろんそれはそれでいいのだが、中にはあの県民歌のように、有名無実になっている歌もあろうかと思う。

これらの歌には、大別して、いわば公的な町民歌、村民歌の類と、〈どこそこ音頭〉というような、くだけた感じのものとがある。町民歌、村民歌は、いわば格調高く、郷土の自然とそこを守る決意を歌いあげ、音頭の方は、ふんだんにハヤシを入れて、情緒ゆたかに色っぽく、というのが定番。

どちらも、それぞれの郷土の特色をもりこんで工夫をこらしてはいるものの、正直いって、似たり寄ったりの感じを受ける。もちろん、曲もいっしょに聞けば、またそれぞれの違いもわかるだろうし、ご当地の人には歌いなれた親しみも生まれるのだろうが、とにかく歌詞だけ見ている分には、申しわけないが、これぞという魅力がほとんど感じられなかった。

そんな中でちょっと異色だったのは「中郷ＹＯＩＴＯＫＯ」。二年前の閉村式に披露されたということだが、全体にイキがよく、やはりハヤシが多用されている中で、〈板橋、藤沢、三ツ屋、坂本……〉と、古くからのこまかい地名をありったけ、ずらずらずらっと並べているのが、失われようとしているものへの愛惜と、そうはさせまいという力がこもっているようでおもしろかった。「よさこいソーラン」と「盆踊り」のバージョンがあるというのも新しい。

どうも全体としてみると、地域で正式にきめたものでない（らしい）、自然発生的にひろまった（らしい）ものの方に、魅力ある歌が多い気がする。

たとえば「おらがふるさと（東頸城の歌）」。個人の作詞作曲によるもので、くり返しが多く、素朴なわらべうたのような味わいがあり、各節の後半はひたすら、どこで（草刈りで…さいの神で…）何を食べた（すいこ食ったっけ…すすけもち食ったっけ…）という思い出に終始しているのが、なんとも楽しい。私は東頸城とは全くご縁がないのだが、東頸城に住んだことのある友人が、何かというとすぐこの歌を熱唱するので、ついつられて口ずさんでしまう。そんな魅力のある歌である。

そして、この種のものの極めつけは、「高田の四季」。終戦直後、高校の先生が作詞作曲して生徒に歌わせたのがはじまりで、以来、市民の愛唱歌としてえんえんと歌いつがれ、外来の客人からも愛されている。

そこで、最初に書いたことを思い出すのだが、新潟県のみならず、県民歌といえばまずたいがい似たような運命をたどっているらしい中で、珍しくも明治以来の長命を誇り、今も県民に熱烈に歌われているばかりか、ほとんど全国的に知られているのが、おとなり長野県の「信濃の国」である。実は私も血統的には半分信州人なので、故郷の歌といえば、まか「高田の四季」、そして「信濃の国」ということになる。

しかし、考えてみればふしぎである。「高田の四季」にしても「信濃の国」にしても、故郷の四季の風景や名所をひたすら歌っている点では、他の多くの市町村民歌とあまり変わりはない。とすると、多くの類似の歌の中で、ある歌が残り、愛される条件というのは、いったい何なのだろう。

それは、曲のよさということももちろんあるが、歌詞についていえば、おそらく、似たような風景をうたっても、その中に、口先だけでない、故郷に対するある熱烈な思いが感じとれる、ということではなかろうか。高名な詩人などの頼まれ作詞が、整ってはいても人の心をうつ力に乏しく、逆に、稚拙であっても真に郷里を大切に思う人の実感のある作詞が長く愛されるのも、思えば当然のことかもしれない。

（児童文学作家）



レプリカは「ニセモノ」か？

小林古径記念美術館学芸員　笹川修一



「画室にて」昭和24年ころ

はじめに

平成十七年四月から、小林古径記念美術館は上越市立総合博物館から組織が分離され、単独の美術館として運営されるようになりました。小林古径邸とあわせて運営することで、古径の芸術性と人となりを同時に観ることができ、今までよりも古径を多角的に紹介することができるようになりました。

平成十七年九月から十一月までの間、小林古径記念美術館では古径作品の「原寸大レプリカ絵画」と当館でこれまで収蔵した古径の素描作品をあわせて展示した展覧会『小林古径の芸術空間―デジタル解析による古径芸術の空間』が開催され、来館者からさまざまな反応をみることができました。

本稿では、この全国的にみても非常にユニークな展覧会を試みた理由やレプリカの意義についてご紹介したいと思います。

日本画家・小林古径

小林古径（一八八三～一九五七）は、高田土橋町、現在の上越市大町一丁目に生まれました。古径の父である株（みき）は高田榊原藩士で、明治三十四年に編纂された『追思有感』によれば十石二人扶持の武士であり、明治維新後、三十五歳の時に新潟駅逓出張局長心得兼新潟郵便局長心得の役職を歴任しています。

古径は幼少の頃から画に親しみ、兄の勧め

によって新潟で山田於菟三郎に画の手ほどきを受け、その後青木香葩に日本画を学びました。画の勉強を始めた頃には両親はもちろんのこと、兄も亡くしていた古径は、自身の才能が高かったこともありますが、画の勉強を究めることの願望が強く、十六歳の時、本格的な画の勉強をするために決心をして、東京弓町の清水宜輝宅に寄寓しました。上京に際しては、当時、新潟新聞（後の新潟日報社）や実業之日本社の主筆をしていた石井勇の紹介により東京の山中古洞を訪ね、歴史画家の松本楓湖への入門紹介をお願いしたところ、彼は強く梶田半古塾への入門を勧めました。これが梶田半古塾における日本画研鑽の第一歩となりました。

実業之日本社の創設者は増田義一で、上越市板倉区（旧中頸城郡板倉町）の出身です。半古塾の初期に手がけた実業之日本社で出版した『幼年の友』や『日本少年』などの挿画を描いていたことも何らかの関連があると思われます。また、上京の際に寄寓した清水宜輝家は代々高田榊原藩士の家柄であり、古径の父である株とは親戚関係でした。清水宜輝は第十五銀行の取締役となり、後に中央電気株式会社の社長となった人物です。その後も東京弓町の自宅において上越出身の有望な青年を援助する上越学生寄宿舎も運営し、人材養成に尽力したことでも知られています。

このようにみてみると、過去に古径自身が語ったものはあまりありませんが、日本画家を志向するにあたっては、地元の人たちの協力があったものと推測されます。

その後、古径は横山大観・菱田春草らが活躍した初期日本美術院を受け継ぎ、再興日本美術院の中で安田靫彦・前田青邨と並んでその中軸を担ってきました。古径は写生を基とする中で、大和絵や琳派、日本の古画などを徹底的に研究し、近代的な感覚を取り入れて成熟させたいわゆる「新古典主義」と呼ばれる画境に到達し、近代日本美術史における一つの頂点を築きました。《竹取物語》、《清姫》、《髪》などに代表される作品は、研ぎ澄まされた線描の美しさとともに清澄な色彩感覚が作品に高い品格を与えています。昭和二十五年（一九五〇）には新潟県人で初めて文化勲章を受章するなど、その芸術性を高く評価されました。



小林古径邸本邸

小林古径記念美術館の所蔵作品

小林古径記念美術館には上越市出身で文化勲章受章日本画家である小林古径が表現した、日本文化の特質やその芸術性を後世に伝えるため、現在数多くの絵画資料が収蔵されており、これらの収蔵品を総称して「小林古径上越コレクション」と呼んでいます。これらのコレクションは専門家の間では非常に高い評価を得ていますが、一般の方々に理解していただくには、より有効な活用方法が必須となります。

また、古径の本画作品は全国各地の主要な美術館や博物館に分蔵されており、一堂に会してその芸術性の全貌を鑑賞することは、大規模な展覧会以外では不可能といえます。近

年では、平成十七年六月から九月まで、東京国立近代美術館・京都国立近代美術館で大規模な「小林古径展」が開催されましたが、今後当分の間はこのような展覧会が開催される見込みはないものと思われます。

小林古径芸術の全貌を紹介することは当館運営目的の一つに挙げられていますが、実際に他館から古径作品を長期にわたって借用し展示公開することは非常に困難なことです。そこで、当館では古径作品の「レプリカ」によって代替させることが現段階では最良の方法ではないかと考えました。

美術とレプリカ

人類の文化は創造と模造あるいは創作と模写の反復によって誕生、発展したものといっても過言ではありません。歴史的に人類文化は文字の創造による意思の伝達、その拡散のための技術として木版から銅版へと進化し、十九世紀初頭には石版（リトグラフ）が加わってきました。この石版をもって新しい時代に到達します。すなわち活字印刷に石版印刷による挿画が付随するようになり、挿画と活字印刷とが協調するようになります。石版印刷は多様な色彩を生み、さらに技術革新を行った結果、芸術作品が多くの人々に流布されて文化が発展してきたといえます。

その後、数十年後にはこれまで人間の手と感性にのみ委ねられてきた複製作業が発達した写真技術に委ねられるようになり、今までより早いスピードで創造と模写が繰り返され、拡散し、そして文化の発展に大きく寄与してきたといえます。

しかし、一方で人々は美術品に関しては同じものをつくることを善とせず、その結果としての模写や模造作品を「偽物」として取り扱かってきた一面もあります。また、美術品を持つことができたのは一握りの権力者階級のみであったため、一般大衆が美術品を自由にみることができるようになったのは歴史的にみれば最近のこと、つまりナポレオンがフランス革命においてルーヴル宮殿を解放し、後にルーヴル美術館として民衆に公開されてからのことといえます。

この世界的な動向の中で、近代日本では美術品を「うつす・まなぶ・つたえる」という思想により、さまざまな模写や模造作品がつくられ、美術文化の伝承に非常に大きな役割を果たしてきました。その時代に生きた人々が美を追求し、創作し、それを写して共有の文化遺産としてその価値を享受してきました。

小林古径作品をはじめとする近代日本画は脆弱な構造であることに加えて、制作されて数十年から百年以上も経ているため、経年劣化が激しく長期にわたる公開が非常に難しくなっています。美術作品は展示などによって制作後百年余りを経過すると次第に退色や剥落などが起きてしまい、常時展示して鑑賞することが難しくなってきます。特に現在では美術作品の活用に対するニーズが高まり、全国でさまざまな展覧会が開催され、その都度美術品は加速度的に損傷を受けているのが現状といえます。

「原寸大レプリカ絵画」の意義

当館で収蔵するレプリカ作品は、小林古径保存会と小林古径記念美術館との共同企画による小林古径作品の「原寸大レプリカ絵画」（The Exact Space of Digital art Picture "E.S.D.P."）が中心となります。この原寸大レプリカ絵画は、小林古径保存会が所有する膨大な古径作品の画像資料をデジタルデータ化して保存されており、その画像解析データを基としてオリジナル作品と「同じ空間（寸法）」で出力画像化したものです。新しい古径芸術の空間的鑑賞と古径の画業資料を比較・展覧することを目的としたもので、鑑賞される方々のさまざまな感覚対応が生まれることを期待しています。

この原寸大レプリカ絵画の特長は全てを原寸大にした点にあります。画集や図録、テレビでは縮小されたものとなり、オリジナル作品の持つ大切な要素である作品の「空間」がやむなく無視されてしまいますが、オリジナル作品と同じ空間（寸法）を持つことによって、オリジナル作品に近い形で作品の持つ存在感や色彩・線などの多くの鑑賞情報を得ることができます。この原寸大レプリカ絵画は、現状で最良かつ極限の技術を駆使し、古径作品を原寸大に再現できたものと考え、古径芸術を「体感」できる一つの新しい方法ではないかと考えています。また、これらの作品の鑑賞をとおして、鑑賞者に対して全国各地で

収蔵されている各所蔵館へのアプローチも可能となり、さらに多くの人々に向けて古径顕彰や芸術振興が展開できるものと思われます。

レプリカは「ニセモノ」か？

英語の「レプリカ」という言葉は、偽物というイメージとして捉えられがちですが、決してそのようなものではありません。「replica（レプリカ）」の語源はラテン語「replicare」、イタリア語「replicare」の派生語で、「反復する」という意味を持っています。ルネサンス期になると、原作者自身あるいは同一の工房等によって制作された原作品（絵画・彫刻など）の写しを意味するようになり、現在では同一作者あるいは同一作者の監督、監修のもとに再制作または許可された作品を示す言葉となりました。このレプリカと混同されてしまうのが、「copy（コピー）」であり、コピーとは模写や複製を意味する言葉として用いられています。しかし、「コピー」と「レプリカ」では、原作者の手が入っているか否かという点において全く意味が異なるのです。さらに、偽物や贋作を示すものとしては「fake（フェイク）」という言葉があります。これは年代や制作者を偽り、鑑賞者や収集家を欺くことを目的として制作された作品を意味するものです。つまり、レプリカと偽物とは概念上全く異なるものなのです。

これらの区分に当てはめた場合、当館が展示している原寸大レプリカ絵画は、原作者と同格である著作権者、小林古径保存会の監修によって制作された「一つの作品」ということができ、模写や偽物とは区別されるべきものといえます。



「小林古径の芸術空間」展示風景

レプリカの未来

当館で導入した原寸大レプリカ絵画は、多くの可能性を秘めていることは言うまでもありません。今後、当館において素描作品と組み合わせて常設展示をすることによって、現在まで収蔵した素描作品群をより有効に活用することができ、古径の知られていなかった画業をわかりやすく伝えることが可能となります。また、子どもたちが古径作品の大きさを身近に体感し、さらに模写などを行うことによって、美術教育や学習活動に有意義な手段として活用できるものと期待されます。市内の小・中学校に持ち込み、美術教育に採り入れるなど、美術館での展示以外にもさまざまな活用の可能性があるものと考えています。

この原寸大レプリカ絵画によって、今後の小林古径記念美術館の運営に大きな利点がもたらされました。しかし、これらの利点をいかに活用していくかが、今後の運営を考える上で非常に重要な課題といえます。そして、この原寸大レプリカ絵画や小林古径の素描作品などの鑑賞をとおして、より多くの人々に、より身近に古径芸術を感じてもらい、豊かな心が育まれることを期待しています。

小林古径記念美術館

小林古径記念美術館は、作品を展示する美術館と古径の居宅・画室とをあわせて公開しています。

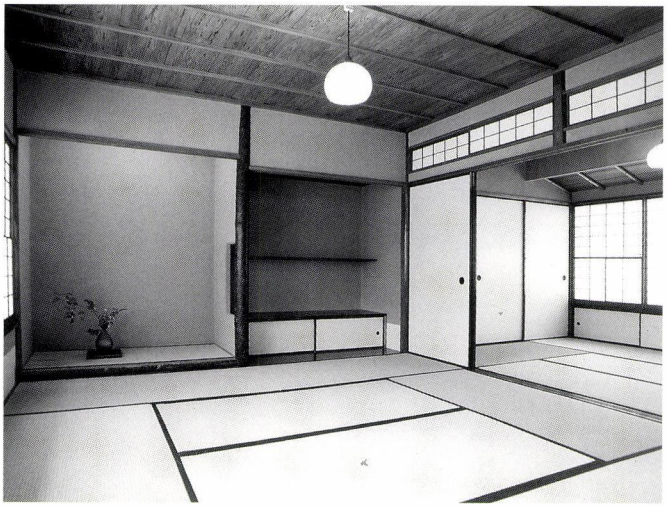
小林古径記念美術館の収蔵品は「小林古径上越コレクション」とも呼ばれ、古径の初期の作品群すなわち「古径芸術の源泉」ともいえる写生や画稿、模写などを含めて約一三〇〇点の作品と古径ゆかりの品々などの多様な収蔵品で構成されています。

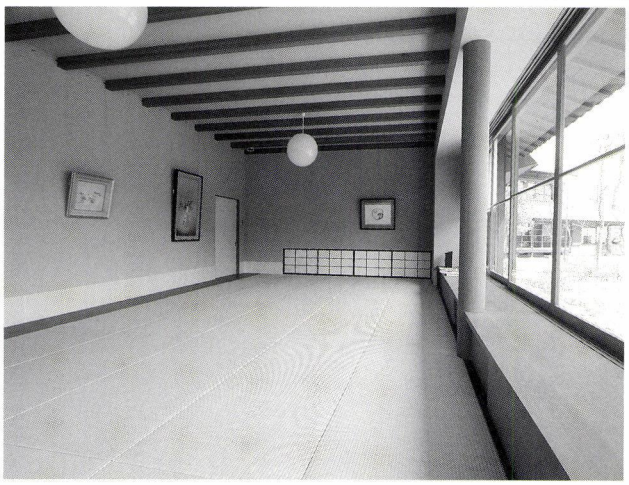
また、移築復原された小林古径邸は、東京都大田区南馬込から上越市高田城跡二の丸跡に移築復原したものであり、小林古径画室は以前の画室を再現し、建築されたものです。これらの建築物は、昭和九年に吉田五十八が小林古径の要望に応じて設計し、宮大工である岡村仁三によって建てられたものです。平成十七年には国の登録有形文化財に指定され、建築学的重要性が認められました。

小林古径記念美術館では、古径芸術を伝える作品群と古径の人物像を伝える古径邸とをあわせて見ることによって、古径芸術をより深く、より多角的にうかがい知ることができます。

上越市本城町（高田公園内）
電話　０２５－５２３－８６８０
開館　午前９時～午後５時
休館　月曜日および祝日の翌日、年末年始
入館　一般４００円
（小林古径邸・総合博物館との共通入館料金）







右上　小林古径記念美術館外観
右下　画室
上　　古径邸２階和室

この人に学べ



書斉にて（大正１年）

川合直次

文人にして政治家
政治家にして文人

生立ち

「高田」の近代化の基を築いた川合直次は、川合家第六代謙造の長男として明治七年二月二十一日に生れた。

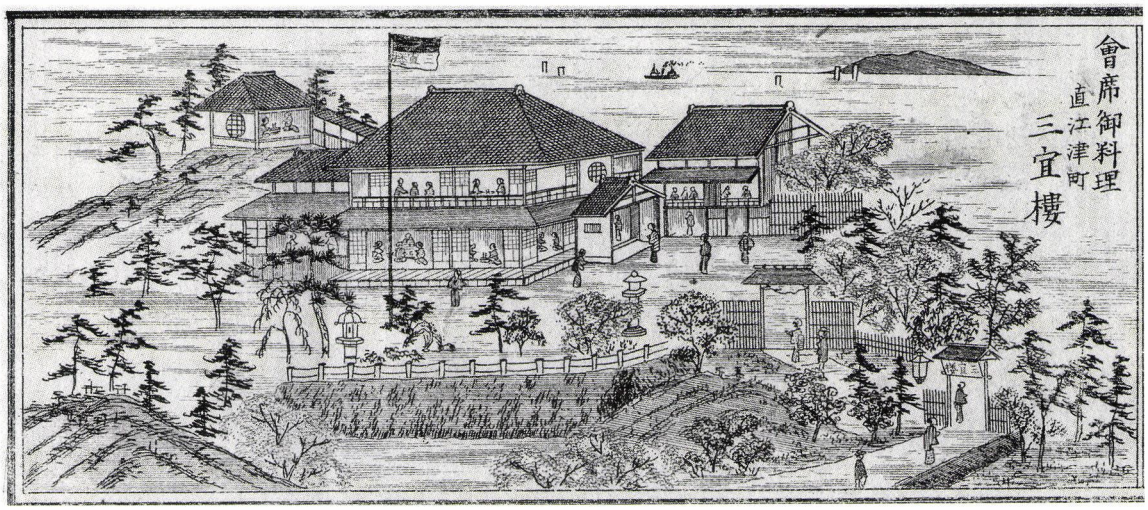
川合家は直江津の川端町（荒川町・三八市通り）で江戸時代から廻船問屋や材木商を営み、屈指の資産家であるとともに町の要職に就く家柄でもあった。

直次は感情豊かな少年であったが、一方で一途な性格の持ち主として育っていった。

明治十二年、六歳で今町校（現直江津小学校の前身）に入る。すでに「日本外史」「文章軌範」などを学んでおり、学校での成績も群を抜き、下校後は近くの勝蓮寺で、さらに「文選」などを習った。

明治十九年、高田学校（高田中学―高田高校の前身）へ入学。信越線は直江津・関山間が開通したばかりで、親戚筋にあたる本誓寺町（東本町四）の室家に下宿することになった。後に寄宿舎へ入るが、校舎と寄宿舎は大手町交差点の榊神社向かい（旧高田図書館）にあり、夜ともなればキツネの鳴き声が聞えるほど寂しかったという。ここで寄宿舎長も勤めた。

同学年は二六名であった。学年中最年少で、弱々しい体つきであったが生来の負けず嫌いを発揮し、成績は首席を一回、三位を下ることはなかった。漢文・倫理・作文・歴史など



紅葉を招いた三宜楼（北越商工便覧）

の課目は特に優れていた。

これら在学中のことは「吟風少年記」（明治一六年八月・吟風は直次の号）に詳しく書かれている。

家業を継ぐ

明治二十一年十一月、直次の人生に大きな転機が訪れた。

ちょうど数学の時間であったという。父危篤の知らせに、馬車を駆って急ぎ帰宅したが、二度と父の声を聞くことはなかった。

家業を継ぐという責任を負った直次には、学業を続けることは許されず、以降正規の学校生活は送っていない。

翌二十二年、十七歳で新井町（新井市―妙高市）の金子斎一郎の長女精子と結婚、川合家の長としての人生を歩み始めた。

文学への夢

直次は家業のかたわら「史記」「左氏伝」などの漢籍を独学でこなし、歴史研究や文学に熱中していた。英語を学ぶことを薦める者や、東京に遊学して帰省しては、政治経済を声高に論じて気炎を上げる者もいたが、ひたすら和漢の古典を学び、文章を作ることに熱心であった。

直次は生涯健康に恵まれず、青年期には上京して診察を受け入院もしているが、明治二十五年五月受診のために上京したおり、当時遊学中のまた従兄増村度次（有恒学舎―有恒高校の創設者）と大磯・鎌倉に遊び「客窓日記」「客窓漫録」「辛卯東遊記」という三つの日記を残した。

帰郷後には「翠紅草子」という小説を書いているが、後年「直江津において小説を書いた者は自分が初めてであろう」と、自らを誇っていたという。

直次は短歌・俳句・漢詩文・随筆・紀行文など広範にわたって才能をいかんなく発揮しているが、なかでも「客窓日記」に始まり大正三年の「甲寅日記」に至る三十余編の日記は「文人川合直次」の面目躍如たるものがある。

文人と交遊

明治三十二年八月の「吟風日記」には、尾崎紅葉との交遊が書かれている。

紅葉は「金色夜叉」連載の疲れを癒すため佐渡へ旅した。直次は十三日、「煙霞療養」の旅から帰る紅葉を直江津の名料亭三宜楼に招いて歌や句会を開き、五智を案内して夏の日



直江津ヤラシャレ踊

の沈みかけるころ、鳳凰楼に席を移して歓談を尽くした。

紅葉は、

この日傘預け申すぞ今日一日
涼めとや七ツ踊りのそでのかぜ

青田暮れてその粒々の思いかな

の句を詠んでいる。七ツ踊りとは、直江津の民謡「ヤラシャレ踊り」のことである。

宴は夜半まで続き、翌日もてなしに感謝しながら直江津を後にした。

直次は中頸城郡議としての仕事の疲れを癒すため、明治三十五年八月、長野県渋温泉へ湯治に出かけているが、「壬寅（じんいん）浴泉日記」によると、東京専門学校（早稲田大学の前身）在学中の小川未明が二十日から湯治に訪れて同宿となり、夜の更けるのも忘れて文学について語り合った。

秋の気配が漂い始めた二十五日早朝、帰京する未明に、

君にあいて今日ぞ我知る
　同じ血に啼く人の多きを
君よ知れ天才遂に朽ち易し
　人間の毒に惑ふな

の歌二首を贈った。この出合いが後々までの交遊の契機となった。

短歌は佐々木信綱の主宰する「竹柏会」に入り修行に務め、明治三十六年から死去するまでに一二七六首の歌が記録され、昭和十三年に公募された「昭和万葉集」（改造社刊）に、

よく見れば高田の兵なり手を挙げて
　礼をなし行く松花江畔

が選ばれている。自身も明治三十一年ころ「二葉会」という結社を組織し、上越短歌革新運動に取り組んでいる。

俳句は遠慮がちに「門外」と号しているが秀作を残し、俳人春山他石（高田の人・「みゆき会」を主宰）は、「巌谷小波調であり、誇張的できれいで明朗で、それで作りすぎたきらいがある。歴史家を任じているだけに、歴史的なにおいが濃厚である」評している。

還暦を目前にして年忘れ
新しき国一つ立て春麗らら

また、熱心に歴史を学んだ直次の上杉謙信に対する崇拝ぶりは、「由来上越は……しこうして我が謙信公は」と言う得意の熱弁で、彼を知る人たちの語り草になっていた。

月白き七尾の夜半に詠みましし
　そのから歌のひびきの高さ

このような熱心な謙信崇拝は、頸城三郡の青年団主催の「謙信公祭」を年中行事にまで発展させる力となっている。彼はまた上越の新民謡、校歌などの作詞も多く手がけ、今も歌われている。

「天は文学者としての頭脳を自分に与えられたのだ」と直次は語り、小川未明も渋温泉の宿で「政治家となるよりは、文士として創作の世界に雄飛したらどうか」と勧めているが、文学一筋に生きることができなかった自らを「もし、親を捨て、妻を捨てて、六年の星霜を無人の境に過ごした釈迦の勇気があったならば、必ずひとかどの文学者となって、名前を天下に輝かし得たことであろう。惜しいかな、自分にはこの勇気が無かった」と述懐している。

死後、夫人の精子と高田市長時代の秘書で



昭和六年十一月十七日、前島記念館落成式の直次（前列右端）。　前島記念館所蔵

あった市川信次（高田の人・高田瞽女の研究家）が中心となり、増村朴斎の序文を得て「吟風遺稿」が出版された。

政治家直次

直次の政治家としての片鱗をうかがわせたのは、明治三十一年の直江津の「八幡（やはた）火事」での活躍ぶりであった。火事は十三時間も燃え続けて一五九五戸を焼失し、川合家も土蔵五棟、家財、貸家数戸を失った。

このときの火災復興の不手際から町長と町会議員が総辞職し、当時二十五歳の直次は、近隣互助を訴えて「直江津協会」を組織し、被災者のために率先して対策を講じた。

この手腕が高く評価され、町議選では改革派の同志全員を当選させた。（彼は被選挙権年齢に達しておらず立候補していない）

三十三年の直江津海岸護岸工事では、工事委員長として一切を監督して完成にこぎつけた。この間、二六歳で中頸城郡議に当選しているが、工事中に政治力の必要性を痛感し、政界へ乗り出すことになったといわれている。

以降、三四歳で県議、明治四十五年には衆議院議員として政治家直次の人生が始まった。

最初の衆議院選は国民党で出馬予定であった。しかし現職の増田義一[*1]と二名の公認は無理と見た上越支部は、川合を思い止まらせようとした。これを知った川合派は総務会の行われている寺町の善導寺に暴れこみ「善導寺事件」として新聞に大きく報道されることになった。結局推薦は得られなかったが、みごと一位で当選した。これ以降、直次は生涯にわたって増田を政敵視することになる。

議会での直次は、綿密な調査資料、豊かな声量と格調高い演説で「川合とはいずこの人間ぞ」と評判になった。大正四年の二度目の選挙では妻精子の応援演説が評判になったが、思いがけない選挙違反に問われ、精子も獄につながれることになり、議員の資格を失った。

この後、十年間は政界の第一線を退き、吟風山人として文芸に親しむかたわら時局を論じる日々を過ごした。

ちなみに、直次はこの選挙違反以前にも、明治三十五年に起きた「教科書[*2]疑獄事件」に連座して投獄されたことがある。当時の教科書は各都道府県が独自に採択しており、出版各社は競って有力者に働きかけて贈賄も行われた。この疑獄事件の検挙者は三府三六県、二〇〇人に達し、新潟県でも現職県知事と二人の県議が検挙された。その内の一人が受け取った現金を直次が預かったとして、結果は無罪であったが、直次も投獄されたのである。

高田市長

大正十三年、河島市長辞任に伴う市長選考委員会は論議の末、第三代高田市長に直次を

＊1　板倉村（板倉区）戸狩出身。雑誌「実業之日本」を譲り受け、実業之日本社を設立。衆議院議員。（一八六九～一九四八）

＊2　この事件を契機に政府と軍が考えていた教科書の「国定」化が推進された。

推すことにした。

「市長は市民の中から」という選考委員の努力にも関わらず、直次に白羽の矢が立ったのは、この前年、大漁座を会場に高田新聞主催の模擬国会が開かれ、直次の堂々たる総理大臣ぶりが市民の血を沸かせ、その政治力が再認識されたためだとも言われている。

ながく野にあった直次は固く辞退したが、一たび意を決すると、

「おれは、高田のためには死んでもやる」

と公言してはばからなかった。

高田市には十三師団の廃止、中頸城郡役所の廃止など難問が山積しており、病弱な直次に任期いっぱい勤まるかかどうか危惧する声もあった。しかし夜遅くまで公務に勤め一日も休むことはなかった。帰りが遅く、車になるような時、途中で「一人乗るも二人乗るも同じだから」と、車に同乗をすすめられた人も少なくなかったという。

直次は、議会の演説原稿を前日には記者に配布して大変喜ばれたが、徹底した質素倹約ぶりで、草稿は包み紙や帯封の裏に書いていた。また市長の年俸を三千円から二千五百円に、交際費も同様な減額を議会に提案し、一方で戸数割（市民税）の大幅な軽減を行った。

このような緊縮財政をとりながらも、懸案であった上水道の完成、託児所、市営住宅、火葬場、ごみ焼却場、全市の区画整理と町名改正など、社会基盤の整備を積極的に行った。そのなかでも市内四小学校の同時改築では、大町小学校を鉄筋コンクリート建築にした。

職業紹介所（公共職業安定所）を県下に先がけて設置、高田商工学校（工業高校・商業高校の前身）の県立移管も行っている。

市の大きな行事になった観桜会、謙信公祭、スキー祭りも直次が創始したものである。市広報の創刊、「高田市民読本」の刊行など、その業績は多大なものがあり、城下町、消費都市として有力な産業を持たなかった高田市が近代都市として発展し得たのは、全て直次の市長としての手腕に負うところであった、と言っても過言ではない。

昭和七年、三たび市長に選ばれたものの増田派との争いが再燃し、反対党の政友会と「杜城会（とじょうかい）」を結成してまで市政を遂行しようとしたが、昭和十一年二月、衆議院新潟第四区民政党候補として推薦されたのを機に、最後の予算を全会一致無修正で通し、十一年二ヶ月におよぶ高田市長の座を降りた。

再び国政へ

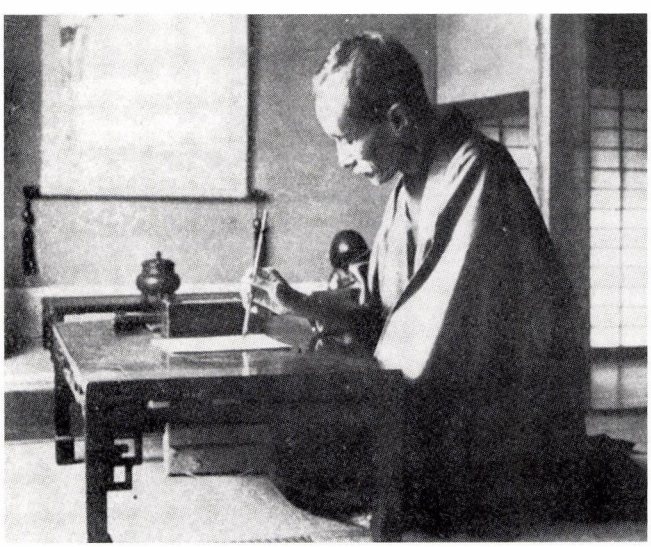
第四区は三議席を民政党二、政友会二、中立一で争う激戦であったが、なかでも二六年を経て再び増田義一と宿命の対決となった。激戦を制した直次は、多年の地方自治・議会政治の功労者として勲三等瑞宝章を受章し、開院式に臨んだが、永年の激務の疲労から病に倒れ、授章式には参列が叶わなかった。

昭和十二年四月、林内閣の抜き打ち解散で三たび国政の場に立ち、十二月の国会でも、戦時体制と言論が規制されるなか、膨れ上がる軍事予算のへの不満と議会制民主主義擁護を強く訴えた。

十三年四月、議会を終えて直江津八幡の自宅「七松居」に帰って、そのまま病の床に就き、八月四日、妻精子、養嗣子熙など近親者に看取られながら帰らぬ人となった。

六日、自宅で葬儀が行われたが、弔辞を述べる人の中に増田義一の姿もあった。

六十五年の生涯であった。



書院での直次（昭和三年）

本稿は元上越市史編纂委員（近代史副部会長）本山松郎氏が『新潟県人物百年史』（頸城編・昭和四二年）に執筆したものを筆者の了解を得て再構成したものである。

参考資料／直江津町史・高田市史・上越市史（通史編5・近代）

川合直次の写真は「吟風遺稿」より転載。

建物さんぽ

その三　潮騒とライオン

直江津の砂丘の町並は、潮風の溜まり場。坂道の迷路。猫の散歩道。大火の繰り返し。

今日は、明治二十五年頃、直江津銀行として新町通りの直江津郵便局近くに建てられ、大正九年に現在地に移築された「高達回漕店」（当時は高橋回漕店）を訪れました。

矩形の隅切部分が、前身の直江津銀行時代の主玄関でした。昔の写真を見ると、日本瓦葺の複雑な寄棟に、切妻の三角が異なる角度で二つ重なり、威風堂々の鬼瓦が角地から三方を睨みます。竣工時の写真なのか、鳥打帽、腹掛け姿の職人風から、中折れ帽の紳士風まで勢揃い。現在の建物よりかなり大きく見えて、移築するときに漆喰壁の高さを削ったのかもしれない。なんといっても潮風の真っ只中だから。

それにしても、この地に鉄の扉は傷ましい。漆喰塗り扉にすれば普通の土蔵になるし、広葉樹の分厚い板扉では、別様式の「洋風」か、奈良の「寺院風」になってしまう。明治の擬洋風建築は、いささか不可解であり、そこがまた魅力的な折衷スタイルなのだが、先ほどの三切妻屋根にも潮風にも、職人は随分と悩んだことでしょう。

内部は、ほぼ古いまま。銀行当時の欅のカウンターから奥は板張りの床で、同じく板張りの高い天井に、レトロな扇風機が吊られています。長距離専用の電話ボックス、外套掛け、ライティングビューローなどに残る直線的な細工は大正モダンのアールデコ風。書類戸棚は古びていても、虎斑杢目の楢材で木目込象嵌と把手がお洒落です。東京から取り寄せたのか、地元の家具木工職人たちが、巧みに都会の流行を取り入れたのか。他にも、地元作家の油絵や木彫像が置かれているから、芸術家の庇護者的存在だったのでしょうか。

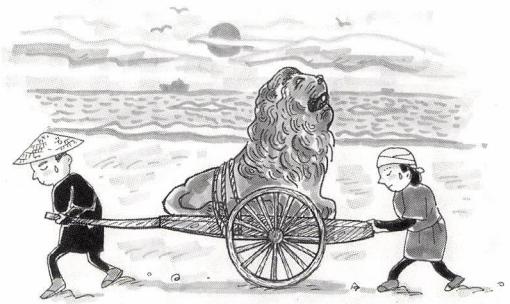
移築の際に増築された裏部分は、欄間のステンドグラスだけが往時の華やかさを物語ります。敷地両脇の長い防火壁も、このときに築造されました。建物本体とは別構造の煉瓦積で、実際に何度かの大火をしのいできました。今は駐車場になっている東側隣地から見ると、凸凹の煉瓦に雑草が生えて、昔の木造家屋の痕跡が残されています。この不思議な煉瓦の壁を背景とする映画か演劇の一幕を想起して、挿絵の樋口さんは少年の決闘シーン。私は七十年代風テント芝居の黒マントの怪人。

そして、昔の玄関前にどっしりと構えるのは、巻き毛のチャーミングなライオン。百獣の王とはいえ、猫科。妙にかわいらしい。台座に「刈羽郡西中通村彫刻師小川由廣」と楷書で刻んであります。聞くところによれば、石工は銀座三越のブロンズ像を参考にして、柏崎にもその兄弟ライオンがいるらしい。大八車に乗せられて、米山の峠を越えてきたとか。険しい登りに車夫が喘ぎ、車輪が軋む。と、彼はふと、背伸びをして立ち上り、車から降りて一緒に登った。潮風にたてがみが渦

巻き、生まれて初めての海をじっと見詰める。そんな光景が浮かびます。砂丘のまちに居座って、早八十六年。まちと建物と一緒に、もっと長生きさせてあげたい。

ここで、急に空が暗くなり、大雨の気配。近くの土蔵カフェに駆け込みました。





文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

投稿

お饌米納め



野本憲雄

弘前、青森のねぶた祭り、山形の花笠祭り、仙台の七夕祭り、徳島の阿波踊り、高知のよさこい祭り、夏祭りの季節である。一度は見たいと思いながらも未だ見てはいない。県内でも、長岡祭り、新潟祭りなど、いたるところで夏祭りの真っ最中である。子どもの頃は、祭りは大変楽しみで待ち遠しかった。

近頃は、とんと見に行かなくなった。あまり見たいとも思わなくなった。見てもいないで的外れかもしれないが、どこのお祭りもワンパターンで、多くの会社や、団体、お祭りキチが会社名や団体名を染め抜いたそろいの浴衣やユニフォームで踊りまくっている。踊っている人たちは大いに楽しそうだし、沢山の見物人も楽しんでいるのだから、文句をつける気持ちなどさらさらないが、なんとなくかつてのようには興味がわかなくなった。自分が年をとって、感激する心が薄らいだのかなあと思ったりもしているが、そうばかりではないような気もする。

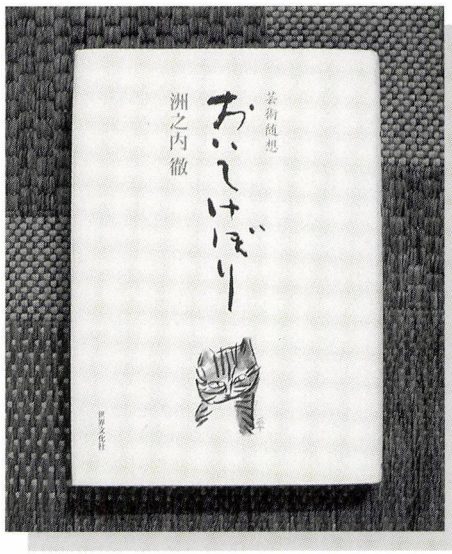
いまだって、いいなあと思う祭りはある。この夏も知り合いを訪ねた折に偶然に見てきた村上の踊りはよかった。古い街並みの、それもごく一部でしかなかったが、夜店も少し出ていて、それほど多くもない見物人の前で、踊りを愛好しているいろいろな団体が熱演していた。お互いに顔見知りも多いのだろう、みんなが温かく見ていて、派手ではないが人のぬくもりが感じられ、子どもの頃のお祭りはこうだったよなあと懐かしく思った。また、この踊りと一連のことなのかどうかは分からないが、町のあちこちでお地蔵さんにお灯明を上げてお参りをしている人々も何組か見かけた。子ども達も、かわいい手を合わせていて、いい光景だなあと思った。敬虔な心、謙虚な心は理屈だけでは決して育たないと思う。人智を超えた存在、そこまでは行かなくても人の浅智慧では及びもつかないこともこの世の中にはありうるという心を育てることは、決して非科学的なことでもなく、非常に大切なことではないかと思う。

七月末に、直江津の祇園祭が見たくなって、見に行ってきた。この祭りは私が高校生だった頃には、確か七月の半ばごろに行われていて、梅雨の末期ということもあって、よく雨にたたられた。七月にはいると町のあちこちから祭囃子の練習の音が聞こえてきて、ああまた夏が来たなあと、楽しみであった。ちょうど期末試験の頃でもあり、眠い目をこすりながら、試験が終わったら祭りだなあとがんばったものだ。久方ぶりに見た屋台は、あの頃はなかった町内も加わったようで、昔より多くなったように思った。

笛、太鼓、鉦の音にあわせて、
「わっしょい、よんやさ。わっしょい、よんやさ」
の懐かしい掛け声とともに、子ども達に牽かれた屋台が安国寺の通りを賑やかに、ゆっくりと、何台も連なってやってきた。屋台の先頭には白装束に手甲、脚絆、わらじ履きの女の子が佐渡おけさの編み笠に飾りを付けたのような笠を着け、鉄の杖を掛け声に合わせてシャンシャン音をさせて進んでくる。
「私もやったわ。思い出すわ」
「中学校の一年生のときは、さすがに恥ずかしかったわ。嫌だったけど、言われて逃げられなかったわ。○○ちゃんは逃げたけど、後々までみんなにいろいろ言われて可哀想だったわ」
と、妻はその頃を思い出しているかのような眼差しで懐かしそうに見ていた。
屋台が八坂神社の前に着くと、会長さんなどがみんなをひときわ威勢よく激しく煽りたて、子どもも大人もにぎやかに大騒ぎをする。いよいよ、〝お饌米納め〟である。町内の看板を先頭に若い衆数人が米俵を担ぎ、また奉納の品をささげ持って参道をお社まで勢いよく駆け抜けるのである。あの頃と比べると、なんとなくおとなしくなったようにも思ったが、それでも勇壮だった。あるいはあの頃の私はチビだったから、私の目線があの頃より高くなったせいかもしれない。この間も屋台の周りでは、大人も子どももそれこそ賑やかに囃し立てて大騒ぎである。
そして、お饌米納めの大役を無事に果たし終えた若い衆が戻ってくると、しばらくしてお囃子のトーンが急におとなしい調子に変わり、屋台はそれぞれの町内へとゆっくり、ゆっくりと帰っていった。大仕事を終えて安堵し、家路に着くこの雰囲気、激しい動からうら寂しささえ感ずるほどの静への変化、今年のお祭りもいよいよ終わるなあという一抹の寂しさがあの頃からなんとも言われずに好きだったが、今年も十分堪能させてもらった。
〝お饌米納め〟は豊作と豊漁を祈念して江戸時代から続いている伝統ある神事だということだが、来年も再来年も、いつまでも続いて欲しいなあと思った。
直江津の祇園祭は昔と比べて祭りの時期が遅くなったが、時期が遅くなったり、早まったりしたお祭りも多い。新潟祭りも昔は八月の下旬だったと思う。小さなお祭りでも時期が早まった秋祭りは、それこそ沢山あるように思う。雨降りだと、あがり（お賽銭）が減るからだよとか、お米の刈り入れの時期が早まったからだよなどと聞いたこともあったが、確かなことは分からない。
ただ、秋祭りには、かつては二百十日を前に、秋の台風シーズンを無事乗り越えて稲がたわわに実り、豊かな実りの季節を迎えさせていただきたいという願いと言おうか信仰があったのではないかと思っている。私の子どもの頃には、稲刈りの時期はいまに比べて随分遅かったように思う。はさに架けられた稲が初雪をかぶっていた景色を見たことがあるようにも思う。農薬の進歩、農業の機械化の進展で、農作業が早まったことはよかったことだと思うが、その一方で祭りはどんどん祈りや願いとは別の世界のことになり、商店街や町のイベントと化して、〝商業的〟になってきているような気がしてならない。
イベント化したお祭りは、人々を飽きさせないようにしないと続かないのではないであろうか。これからもどんどん派手になり、新趣向を凝らしていかなければ人々をつなぎとめられないであろう。根っこがなく、あっちの町ではこんな催しをやっている、こっちの町ではこうだだけでは、何の事はない、時間とお金をかけながら、どこのお祭りもどんどんワンパターン化して似たり寄ったりなものに堕し、人の心が離れてしまうのではないかと心配である。何も変えてはいけないといっているのではない。祭りには、それを長い間続けている精神といおうか、心といおうかがあり、それを忘れてしまったら、まったく意味がない馬鹿騒ぎでしかないようで寂しい。
伝統ある直江津の祇園祭、お饌米納めがお祭りの心を失わずにいつまでも続いていて欲しいなあと思って去っていく屋台の灯りを見ていた。

筆者　上越市（直江津）出身
元新潟県教育長
新潟市在住

■読書びと



おいてけぼり

洲之内 徹著

世界文化社刊
二六〇〇円（本体）

テレビの鑑定ショーの余波で、印判手の蕎麦猪口から温泉旅館の廊下に飾られた古箪笥まで、骨董屋価格に換算しないと価値の計れぬへんな世になってしまった。細君と善光寺灯明まつりに行き、足を伸ばした信濃美術館で林倭衛の特設展に見入りながらそんな番外の思いにいたったのは、昔読んだ洲之内徹の『絵のなかの散歩』（新潮社・一九七三）に「中村彝と林倭衛」という一文があって、彼が所蔵する自画像と少女像への愛着と、彼我の絶望的な価格差について書かれていたのを記憶していたからだ。

『洲之内徹の風景』（春秋社・九六年）という想い籠った追悼本がある。「回想の現代画廊」刊行会、が声をかけ、画廊とその主人の歩みを立体的に再現しようと、野見山暁治、白州正子ほか九十二名のエッセイが集められた。大原富枝による評伝『彼もまた神の愛でし子か』（講談社・八九年）はじめ語られることの多いこの〈画商〉はいったい何ものだったのか。

洲之内徹は、一九一三（大正二）年松山市に生まれた。東京美術学校建築科在学中にプロレタリア美術家同盟に加入、検挙拘留転向という軌跡を経て、三八年から敗戦まで中国で陸軍の諜報活動に従事する。引き上げ後は小説家として活動、A賞に三回ノミネートされるも作家田村泰次郎が始めた「現代画廊」に入社、一九六一年より経営を引き継ぎ、自称〈日本一小さな画廊主〉となる。萬鉄五郎展が洲之内の画廊開きで、その後も古茂田守介、吉岡憲、靉光など当時はまったく評価されなかった画家の個展を開催し続けた。そして七四年から『気まぐれ美術館』と題して、私小説家のやったことを美術論で行ったと評された連載を、十四年間に亘り『藝術新潮』で展開し、一九八七年に病により七十四歳でこの世を去った。一四六点の洲之内コレクションは宮城県美術館に収まっている。

白洲正子や大岡信などの瀟洒なアンソロジーをシリーズで手渡してくれる世界文化社のSは、大岡の描くところによれば、タイトル、目次、図版の割付まですべて設えた上で著者に出版交渉をする伝説的な名編輯者である。足立倫行の『イワナ棲む山里』他の〈ネイチャーブックス〉を手がけていた頃よりSの仕事ぶりに共感してきた私にとって、二〇〇四年二月に上梓された『おいてけぼり』と翌年の姉妹編『しゃれのめす』の出版はまさに当を得たものであった。

洲之内の未刊行文集『おいてけぼり』の中心は一九六二年暮れから一年余り故郷の愛媛新聞に連載された三三篇の「新聞版　気まぐれ美術館」である。画商になって四年、「ぜったい売りたくない絵とぜったいにうれそうもない作品とがおいおいに手もとに残って、私のアパートのへやの大半を埋めている。」と各々の絵との出会いを語り、最初から彼が、絵画が此の世に生まれ存在する根源を本能で確信し、貪欲に人や様々な土地を訪ねる求道のひとであった証を読み取ることが出来る。そののちの洲之内ワールドの原点が強く薫るのも当然で、出発のときすでに、智慧と思想、男女と処世のタブローを内に描ききった五十歳の男がいたのだ。

『おいてけぼり』のエピグラフに「心に感動がなければ、物は見ないにひとしい。」とある。今はない名雑誌『アルプ』に発表された言葉のスケッチ「山のとびら」や、洲之内の全作品を通底してのコメントを鏤めた多くの図版に飾られている。時に磨かれ生まれた珠玉の一冊。

閑暇の愉しみの第一は、本について書かれた趣味のいい本を枕頭におくこと、絵に纏わる文を読み散かしながらかって出合った作品の陰影を思い浮かべるひとときに尽きる。松田正平の題字、装画も含め、洲之内徹の初心を生かした見事な〈編輯〉で新しい悦びを得た。（心）

カメラの眼



すっかり定着した町家の催し



創作「はすの実人形」



町家で民話を聞く

納涼　互の市

夏点描

まちなか



木工体験



中央商店街恒例ビアガーデン



くじら汁も



マジシャン“カズ”のマジックに釘付け

エスニックグッズも





お盆の花市

上越産業振興研究所レポート

グリーン・ツーリズムの魅力

まずは体験から

バスに揺られて一時間、棚田や萱葺き屋根の家が見えてきました。

「ええっ、ここも上越市？」

「へえーここを田舎って言うんだ」

今年六月、小学校の親子活動で中ノ俣を訪れたときの子ども達の声です。海の近くに住む子ども達が初めて目にする里山の景観がそこにありました。

中ノ俣地区は、全住民百人中九割が六十五歳以上という高齢化地域ですが、皆さんの表情は明るく〝自然と仲良く〟生き生きと暮らしています。八年前、ここに廃校を利用して地球環境学校（体験型学習施設）が開設されました。自然の中から生きるための知恵や技を地域の高齢者を先生にして学びます。

この日参加した親子は、小枝や木の実、アケビの蔓や木の葉でフォトスタンドを作りました。木工細工、草木染、わら草履編みなど、昔ながらの生活の知恵や技術が多く残っていることに感心するばかりでした。

発祥の地ヨーロッパ

ヨーロッパでは長期のバカンスを取るのが普通で、そのために農村へ出かけ、土地の生活に溶け込んで長期滞在する旅行形態―グリーン・ツーリズム―が普及しました。なかでも国土の半分以上が農地である農業国のフランスでは五十年以上の歴史があり、所得の低い層でも、田舎で長期バカンスを楽しむことができる仕組みが早くから整えられました。グリーン・ツーリズムの魅力は安価であるということだけではなく、農村らしい魅力たっぷりの宿を見つけ、自然の中を歩いたり、古い建物や地元の歴史博物館を見学し、農家レストランでゆっくり郷土料理を味わったりと、地元の人々と触れ合いながらのんびりと過ごす癒しの場であるということです。

迎える側の人達は、利益追求の観光ビジネスではなく、むしろ大勢の人を呼び込むことを避け、個人や自治体の小規模な活動のなかから、グリーン・ツーリズムを通して、農村のあるべき伝統や景観を守っていこうとしています。儲けが少なくても、古い家を廃屋にして朽ち果てさせずに守ることができ、そして都会の人との触れ合いを楽しめればよい、ということのようです。

酪農や畜産が盛んなドイツのバイエルン州では、少子化・過疎化が進み農業の規模拡大が難しくなったことを背景としています。小規模な農家が協力し、酪農・畜産を中心とした〈体験観光〉が生まれました。農家の空き部屋、納屋、畜舎を宿泊施設に改装して提供し、地元の食材を使った家庭料理を出すことから始まりました。

スローフード運動発祥の地イタリアは、伝統的で個性的な食文化を守ることに主眼を置くなど、その国その土地の農業形態や風土により、それぞれ個性あるグリーン・ツーリズムを提供しています。



日本では

政府は平成七年、農村振興策として「農山漁村滞在型余暇活動促進法」を施行し、農村に滞在し余暇活動をすることを「グリーン・ツーリズム」と呼ぶようにしました。

農村の持つ美しい自然、安心安全な美味しい作物や様々な伝統的生活技術が〝宝物〟として再認識されると、農山村の生活が子ども達の教育の場として注目されるようになり、親子活動や修学旅行でもグリーン・ツーリズムを採り入れる学校が増えてきました。

このようなことで、農山村の景観や人・物が地域資源として提供される道が開け、村に新しいミニ事業が生まれて、高齢者の収入源ともなっています。しかし、それ以上に嬉しいことは、グリーン・ツーリズムが高齢化・過疎化の波の中でややもすれば〝シュン〟となりがちな農山村の人々に「元気のもと」や「生き甲斐作り」を提供する役割をも果たしていることです。



越後田舎体験　受入れ実績

越後田舎体験推進協議会

年度	団体合計数	団体内訳				民泊数	人数	泊数
		小学校	中学校	高校	その他			
11	10	1	5	1	3	2	1,008	2,472
12	17	2	9	3	3	6	1,500	3,425
13	23	3	15	2	3	12	2,519	4,999
14	29	6	20	3	0	21	3,584	7,594
15	46	7	35	4	0	29	5,336	11,364
16	45	8	33	3	1	35	4,851	10,488
17	46	8	32	5	1	34	4,956	10,384

平成17年度　民泊受入れ協力戸数約400軒

上越では

平成四年、過疎化に悩む大島村（大島区）が「越後田舎体験」事業を独自で始め、本物志向の田舎体験の評判がクチコミで拡がり、平成十五年には一万人を突破し、今や一億円産業に成長しました。田植えや稲刈りなどの農業体験、藁細工などの伝統工芸体験はじめ、自然観察、環境学習など多彩なメニューが整い、大規模な受け入れも可能になりました。

そして、海のエリア（区）と連携して地引き網体験もできるようになりました。

農家民泊ができることも大きな魅力で、平成十七年には受け入れ四十六校のうち三十四校が民泊を希望しました。そしてリピーターが多いのも越後田舎体験の特徴です。

また、グリーン・ツーリズムがかけ橋となって、横浜と牧区の小学校の交流が始まりました。五月には横浜の子ども達が縄作りや田植え体験、六月は牧区の小学生が横浜へ行き交流を深めています。

上越市では体験事業だけではなく、棚田オーナー制や市民農園など、各地域で特色あるグリーン・ツーリズムが行われ、遊休農地の活用や担い手不足の解消、農産物の販路拡大へと展開していく可能性を生みだしています。

「まずは体験から」と、中ノ俣での体験から書き始めましたが、子ども達には教室では感じることのできない新鮮な体験となり、大人にとっても普段の生活からは思いもよらない貴重な時間となりました。

私自身、「また訪れたい」と思った今回の体験学習は、当研究所がグリーン・ツーリズムを中山間地の地域振興（再生）の一環として、常々注目してきたことの意味を再認識させる旅となりました。

（山本和子研究員）

地域を映す

こどもの眼

川 いきる・人 いきる

魚とりから川を感じ始めた私たち

■上越教育大学附属小学校４年１組

私たちは、たくさんの川へ出かけ、たくさんの生き物を捕まえてきました。そして、川にはそれぞれ違いのあることが分かってきました。

正善寺川と青田川の違いをみなさんは分かりますか。もちろん川の大きさや形も違います。でも、私たちが一番感じた違いは「魚のとれ方」です。正善寺川は、魚がすごくたくさんとれます。大きな弓だもをもって、川に入ると、ドジョウ、フナ、カマツカ、モクズガニなど、たくさん捕まえることができます。ところが、青田川は、上流にはたくさんの生き物がいても、中・下流になると魚がいなくなるのです。私たちは、その違いをさぐってみました。分かったことは、川の中にある草の量の違いです。正善寺川の中は、水草で一杯です。その草の根元には魚が一杯いるのです。一方、青田川は水草が少なく、人の手によって整備されている感じがします。みなさんも二つの川へ出かけてみてください。

二学期も、四年一組はいろいろな川へ行って、川の違いを見つけてきます。

〔連載小説〕

関川物語

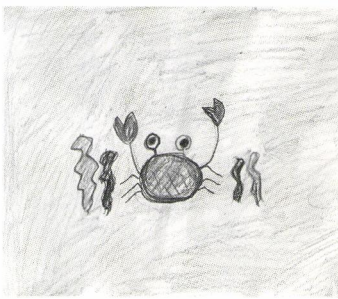
―ヨッシーとクランの大ピンチ！―

関川を下っていくと、今までには見たことのない世界が広がっていた。深くて広い川の姿に、ヨッシーとクランは大喜びだ。その時「ドーン！」ヨッシーが何かにぶつかった。ヨッシーがゆっくりと顔を上げると、そこには何と巨大なザリガニが体を真っ赤に染め、大きなハサミを持ち上げていた。怖くなったクランは、水草の中にサッと身をひそめた。ヨッシーは怖くて、体をぶるぶる震わせている。ザリガニの大きなハサミが今にもヨッシーに振り下ろされそうになった、その時、黒い影がザリガニに向かって体当たり。驚いたザリガニの目がクルクル回って、ハサミはヨッシーの体をかすめていった。「大丈夫？僕はヤゴのギルだよ。しっかりして！一緒に戦おう！」目を覚ましたヨッシー、水草から出てきたクラン、そしてギルの三人は、一気にザリガニへ突撃した。ヨッシーはザリガニの身動きがとれないように体をぴったりとザリガニの硬い殻にくっつき、ギルはザリガニの足にかみつく。そして、クランが小さなハサミを素早く動かして、ザリガニの足へ攻撃。ついには、ザリガニを倒すことができた。二人の旅に、ギルという仲間が加わった。

気が付くと、そこは青田川の付近だった。もう、目的の関川河口まで半分くらい。青田川に入っていくと、そこは水深の浅い、コンクリートで整えられた川の中の風景だった。知道橋の下に行くと、タモロコのおじいさんが顔の下側にある口を器用に動かしながら、川底の餌を食べている。「タモロコのおじいさん、秘密の薬草って知っている？」タモロコのおじいさんは、ゆっくりと砂を吐き出しながら「秘密の薬草は…関川の底に生えているヨモギのことじゃ。」と答えた。３人の目がキラっと輝いた。（最終話へ続く）



弓だもを持って雑魚捕りにむかう！



五・七・五作文

魚たち　夏のおわりに　かなしそう

水そうは　魚とカニの　広場だね

カマツカは　川の中では　そうじ屋だ

川魚　夏の思い出　ふりかえる

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

■長雨のため「まち・むらの唄」から見える十三区の景観の撮影が大幅に遅れてしまい、こんどは猛暑の中をまわることになった。柿崎川ダムをめぐって吟川・大出口の清水にのどを潤し尾神岳をめぐる景観、穏やかなくびき大池のキャンプ場、甲州と間違いそうな山本ぶどう園のながめ等々、行政の区画とは関わりなく、上越後は豊かな土地であることを実感させられた。

■示唆に富むありがたい投稿をいただきました。まことにありがとうございます。

第6巻4号　12月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」秋号
第六巻三号　通巻二十三号
発行日／平成十八年九月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三－九－五
〒九四二－〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇一五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十八年九月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)